

主 題：あなたへの祝福を忘れない1
 聖書箇所：エペソ人への手紙 1章3節

エペソ人への手紙1：3でパウロはこのように語っています。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。」と。この「ほめたたえる」ということばは「その方のすばらしさを誉めること、また、その方を良く言うこと」です。パウロは彼の信じる唯一真の神のすばらしさ、そのことを誉めるとともに、このお方を人々の前で良く言うこと、それが彼の願いでした。それに価するお方である、このお方だけが称賛に価するお方であると。そして、そのことを旧約の信者たちも新約の信者たちも、そして、それ以降の私たちも繰り返して来ました。

ダビデはこう言います。詩篇145：3「【主】は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。」と。お分かりのように、信仰者たちは時代に関係なく場所に関係なく、神の偉大さを仰ぎ見てその偉大な神を心から誉め称えました。私たちもそのために生かされています。恐らく、皆さんもそのように日々歩んでおられるはず。この新しい年の最初のこの主日に、私たちは神を誉め称えるのですが、ごいっしょに考えたいことは、「なぜ、私たちはこの方を誉め称えるのか？」その理由です。賛美することはできます。神のすばらしさを口にすることはできます。でも問題は、心から本当にそのように思っているかどうかです。みことばが私たちに教える二つの理由を見ていきます。

☆私たちが神を誉め称えるその理由

1. 創造主なる神だから

皆さんに思い出していただきたいのは、黙示録の中で、ヨハネが彼に世の終わりに関するメッセージを告げた天使に、そして、数々の幻を見せたこの天使を拝もうとするところが書かれています。ヨハネはそのメッセージに幻に驚きを隠すことができず、その天使を拝もうとしました。そのときに天使が次のようなメッセージをヨハネに与えています。黙示録19：10「そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」、また、同じ黙示録22：9にも「すると、彼は私に言った。「やめなさい。私は、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書のことばを堅く守る人々と同じしもべです。神を拝みなさい。」とあります。この二箇所と同じことが繰り返されています。それは「やめなさい」ということばです。ここには二つの否定語が記されていて強い禁止が表されています。禁止を強調しているのです。「してはならない、絶対にしてはならない」と言うのです。天使が教えたことは「私たちが崇拝するお方はただ一人だ。すべてをお造りになった神だけであって、それ以外のものを崇拝しては絶対にならない。」ということです。これが天使のメッセージです。その理由は「このお方だけがすべてをお造りになった神だから」です。神というのはすべてをお造りになった方です。過去の偉人ではありません。人間の手でこしらえることのできるような存在ではありません。そこでこの天使は「それにふさわしいお方、被造物による称賛が最もふさわしいお方、それを受けるに最もふさわしいお方は創造主なる神だけだ。神だけを拝みなさい。」と言ったのです。

悲しいことに、この神を崇拝をしていない人たちがこの世の中に溢れています。我々もその中のひとりでした。パウロが教えているように、人間は神でないものを崇拝していると言います。ローマ書1：23-25「:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」、創造主でないもの、人間であつたり鳥、動物、はうものなど、創造主によって造られた被造物を創造主の代わりに崇拝するという大変大きな罪を人間は犯していると言います。パウロは続けてこのように言います。「:24 それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」。こうして人間は私たちが造ってくださり、この自然界のすべてをお造りになった創造主なる神を拝むことなく、崇めることなく、そうでないものを崇めていると言うのです。

だから、必ず、神のさばきが下るのです。神はこのような罪を良しとなさるようなお方ではありません。必ず、この罪に対するさばきがあります。そして、恐ろしいことに、人間はそのさばきがあるということを知っていながらなおも神に逆らい続けているのです。同じローマ1：32に「彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。」と。人々は偶像礼拝を継続している。何が起ころうと彼らはそれを止めないと言います。

不思議ですね。私たちもそのことを経験しています。クリスマスには多くの人たちがいろいろな形でイエス・キリストのご降誕の意義を知ったでしょう。少なくとも、そのメッセージを聞いたでしょう。救い主が来てくださった。私たちの罪を完全に赦すために救い主が来てくださったと。でも、その後しばらくすると、神でないところ行って神としてそれらを崇拜しています。

イザヤがこんなことを言っています。まさに、人間の根本的な問題を上手く表現しています。イザヤ書 42 : 25 「そこで主は、燃える怒りをこれに注ぎ、激しい戦いをこれに向けた。それがあたりを焼き尽くしても、彼は悟らず、自分に燃えついても、心に留めなかった。」、つまり、神のさばきが下っても、それでも人間は心に留めないと。「心に留める」とは「注意を払う」という意味です。つまり、人間の問題というのは、真実に対して注意を払おうとしないこと、神に対して注意を払おうとしないことです。自分が手を合わせ崇拜している対象が、自分が崇めている存在がどんな存在であるかそんなことに全く注意を払おうとしないのです。たとえ、それが滅びのときであっても人間は愚かにも神の前に心を開かないと言います。まさに、その通りでしょう？だれを崇拜しているのか、だれを崇めているのか、だれを誉め称えているのか、そんなことはどうでも良いのです。でも、みことばが言うように、必ずこのように神を神として崇めない人たちに対して、神に逆らい続ける者たちに対して、神はさばきを下します。そのときだれ一人としてその神に反論することはできません。なぜなら、知っていながら、間違っていることを知っていながら、それを行い、それを行っている人々に賛同して来たからです。

でも感謝なことに、私たちの目は開かれたのです。この自然界を見たときに、また、私たち自身を見たときに、それらが偶然にできたものではないこと、それらをお造りになった創造主がいることに私たちは気づかせていただいたのです。この方が創造主であるゆえに、私たちを造りすべてをお造りになったいのちの源であるゆえに、神であるゆえに、私たちはこの方を称えます。この方だけが被造物によって誉め称えるに価するお方、称賛を受けるに価するお方です。それが一つ目の理由です。

2. 神が私たちが祝福してくださったから、その祝福のゆえに 3節

3b節「神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちが祝福してくださいました。」、最初に話したように、パウロは神を誉め称えながらこの地上での生活を全うして生きていきました。それは余りにも神の恵みがすばらしいから、神ご自身がすばらしいお方だから、そして、自分にこのすばらしい霊的祝福をくださったからです。そのことを知って彼はその神を誉め称えていたのです。でも、パウロは自分がそのように歩んでいただけではありません。他のクリスチャンたち、兄弟姉妹たちも同じように歩むようにとこのメッセージを与えるのです。なぜなら、私たちはすぐに忘れてしまうからです。確かに、私たちはあるときは神の恵みを覚えそれを心から感謝していました。でも残念ながら、それをすぐに忘れてしまいます。

もし、私たちがこの神が与えてくださったすばらしい祝福を忘れていたら、こんなことがその人の信仰生活に起こります。その人の歩みに感謝も感動も無くなっていきます。かつては神によって与えられた祝福を感謝し喜びながら歩んでいたのに、いつの間にかそういうものが無くなっていってしまう。喜びのないもの、信仰生活の中に力も無くなってしまいます。そんな方がいらっしやるかもしれません。

皆さん、どうしたら良いのか？もう一度思い出すことです。どんな祝福を神があなたに与えてくださったかを。みことばはそのことを教えてくれます。ですから、もう一度あなたに与えられた祝福を忘れないこと、しっかりそれを覚えることです。

サムエルはこんなことを言っています。Iサムエル記 12 : 24 「ただ、【主】を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい。主がどれほど偉大なことをあなたがたになされたかを見分けなさい。」と。この「見分けなさい」はおもしろいことばで「観察しなさい、熟慮しなさい」という意味です。つまり、「よく考えなさい」ということです。旧約時代にも同じことが言われたのです。「よく考えなさい。熟慮しなさい、観察しなさい。どんな祝福を神が与えてくださったのかを、」と。ダビデもこう言います。

「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」(詩篇 103 : 2)。感動をもって生きていくために、喜びをもって生きていくために、力をもって生きていくために必要なことは、主がどんな祝福をくださったのか、主が与えてくださったその祝福をしっかりと覚え続けること、忘れないことです。今から見ていきます。

☆主が与えてくださった「霊的祝福」、どのような祝福が与えられたのか？

3節に「天にあるすべての霊的祝福」と、祝福についてパウロはこのように説明しています。「霊的」ということばが新約聖書で使われている時は「聖霊の働き」として用いられます。つまり、この祝福とは聖霊なる神を通して与えられるものだと言います。しかも、この祝福はこの世的なものではなく、天からのもの、つまり、神からのものだと言います。しかも、この「霊的祝福」に関して、それは「一部の霊的祝福」ではなく「すべての霊的祝福」だと言い、そのすべてがあなたに与えられていると教えます。

そして、「私たちが祝福してくださいました。」というこの動詞が完了形を使っているのは、イエス・キリストを信じたときにこの祝福はすでにあなたに与えられたということ、そして、その与えられた祝福が今もあなたに与えられ続けている、その祝福が変わらずあなたを祝福してくれていると、そのことを私たちに教えようとするのです。これは過去の出来事ではなく今のことです。このすべての霊的祝福をいただき、その祝福の中をあなたは歩んでいると言うのです。そのことを教えた後、パウロはその祝福がどんなものか、その説明を加えていきます。

1) 救い 4節

最初の祝福は「救い」です。この「救い」に関してパウロは、このエペソ書1章の中で二つのことばを使ってそのことを説明しています。その一つが「選び」です。

(1) 選び : 4節「すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、」、ここに「選び」ということばがあります。この「選び」ということばは「何かを引き抜く、多くの中から引き抜いて用いる」という意味があります。また、ここで使われている動詞の時制を見ると「自分自身のために引き抜く」ということを明らかにしています。まとめると、「選び」ということばが明らかにしていることは「神ご自身が神ご自身のために選んでくださった。神ご自身が用いるために引き抜いてくださった。」ということなのです。

皆さん、クリスチャンであるあなたは、神が神ご自身の目的のために、神ご自身があなたを用いるためにあなたを引き抜いた、選んでくださったのです。神はあなたを使ってくれるのです。そのためにあなたは選ばれたと言います。しかも、この「選び」というすばらしい恵みは神による一方的な恵みであると言います。Ⅱテモテ1:9に「神は私たちが救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」と書かれています。神はあなたを救い、また、聖なる招きをもってあなたを名指しで呼んでくださった。でも、これはあなたの働きによるのではない。あなたが何かをしたからではない。「神ご自身の計画と恵みによる」と言います。神がご自分のためにあなたを用いようとしてくださったのです。神はあなたを選ばれたのです。それは神のご計画だったのです。そして、神は罪の中からあなたを呼び出してくださって、ご自分のためにあなたを用いようとしてくださったのです。

ですから、この「救い」、特に「選び」は「神ご自身の主権とご意志」をもってなされたわざだったのです。あなたの働きとは全く関係ないのです。神がそのように決めてそのように為されたのです。

(2) 贖い : 7節に「この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」と、ここに「贖い」ということばが出ています。

「贖い」とは「市場に行って買う」という意味と「市場から買い出して二度と売りに出さない」という意味があります。当時、人が市場に奴隷を買いにいきます。競売にかけられている奴隷を購入します。お金を払ったその引き換えに買った人にその奴隷が引き渡される訳です。そのとき買った人はその奴隷にある法律上の書類を手渡します。そこにはこの「贖い」という文字が書かれていたのです。つまり、私はもう二度とあなたを競売には出さないという意味です。

パウロがこの「贖い」ということばを用いることによって言いたかったことは、「あなたは神の一方的な恵みによって、罪のさばきから永遠のさばきから地獄から神ののろいからその罪の力から解放されて、そして、自由にされた。」ということなのです。「わたしはもう二度とあなたをかつての奴隷の状態に、あなたを束縛していたそののろいに戻すことはしない。」と言うのです。なぜなら、神があなたを捕まえてくださっているから、神があなたを自由へと解放してくださったからです。これが救いなのです。神によって本当に救われた人はその救いを絶対に失うことはありません。なぜなら、神がそのような約束をくださったからです。「贖われた」とはそういうことです。これもすべて神の一方的な恵みです。

こうして、神が私たちが救いへと導いてくださいました。神があなたをご自身の計画に基づいて選んでくださり、そして、神があなたをご自身の目的のために用いようとしてくださっています。そして、罪赦されたあなたは永遠に赦され、そして、神のしもべとして、奴隷として歩むことができるのです。

「救い」は100%神の恵みです。神に背き神に逆らっていたあなたを神は愛してあわれんで、そして、あなたを救いへと導いてくださったのです。思い出しましたか？皆さん。このような神の一方的なご計画に基づいて、このようなすばらしい神の恵みによって今あなたはこうして生かれています。

今見て来たように、この「救い」に関して私たちは何も行っていません。私たちが為して来たことは神に逆らい背き続けることだけでした。しかし、神のご計画によって、このようなすばらしい祝福が私たちに与えられたのです。私たちの罪は赦されたのです。私たちの罪は永遠に完全に始末されたのです。感謝だと思いませんか？皆さん！この祝福が私たちに与えられたとパウロは教えます。

2) 交わり : 4 b 節

二つ目は「交わり」です。聖い神と交わることができるのです。4節の後半に「御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」とあります。罪が赦されてあなたは聖い者とされた。ゆえに、聖い神と交わることが可能となったのです。罪をもったまま私たちは神の前に出て行くことはできませんでした。神がそれを聖めてくださった。でも確かに、私たちは日々の生活で神に逆らうことが多いです。神を悲しませることが多いです。こんな私が神の前に立つことができるのか？と、そのように自問される方もたくさんおられるでしょう。ある人は「こんな私は神の前に立てない」と言われるかもしれません。でも、皆さん、神はあなたがどれほど罪深いかはあなたよりもご存じです。本当の私たちの汚れ、私たちの醜さ、私たちの愚かさは私たちよりも神がご存じです。

では、そんな私たちがなぜこの聖い罪の無い正しい神の前に立つことができるのでしょうか？どうしてこんな私たちが神の前に祈ることができるのか？私たちの心の思いをこの方の前に持っていくことができるのか？それは皆さん、神があなたを見る時にあなたの上に塗られているイエス・キリストの血潮を見るからです。ちょうど、あの過ぎ越しのときに、門柱とかもいに羊の血が塗られている家が過ぎ越されてさばきに合わなかったように…。あなたの上に、そして、私の上にはイエス・キリストの血潮が塗られているのです。ゆえに、私たちは聖められた者として、赦された者としてこの聖い神の前に立つことができるのです。

毎日の生活でいろんな不安材料があります。だんだん身体は弱っていきます。確実に、私たちは死へと向かって歩んでいます。でも、私たちクリスチャンがそのような中でも喜びをもって感謝できるのは、どんなときでも、また、どんなことでも持っていく対象が私たちの傍にいてくださるからでしょう？私たちは私たちの心のどんなものでも持っていくところがあるのです。一人で抱えることもできます。でも、そこには何の解決もありません。でも、私たちは解決してくださる神の許に持っていけるのです。私たちは自由に神の前に出て行けるのです。神は私たちをさばくのではなく私たちを歓迎して下さりそして、私たちとそのように親しい交わりをもってくださるのです。

祈れることがどんなにすばらしいことか、皆さん分かっておられますか？全知全能のすべてのものをお造りになり、あの天使も恐れたその神の前に私たちは自由に出て行けるのです。この方に私たちのような小さなもののいろんな願いや思い、失敗や不安、そのすべてを持っていくことができるのです。そんな特権に与ったのです。このような偉大な全能なる神の前にいつでも出て行ける。この神は24時間、365日いつも私たちと交わることを喜んでくださる。こんな特権に私たち信仰者は与っているのです。

3) 恒久的な住まい

三つ目の祝福は「恒久的な住まいが与えられる」ことです。自分たちはイエスが行かれる所に付いて行くことができないことを知って動揺していた弟子たちに、主はこのようなメッセージを与えました。ヨハネの福音書14:2、3「:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」と。

私たち信仰者には永遠の住まいがもうすでに設けられたのです。私たちの身体は弱っていくし、いつ死を迎えるかわからないけれど、それは終わりではなくて永遠の始まりです。私たちは天にあってイエス・キリストとともに永遠を過ごすのです。そして、この救いに与っていた私たちの愛する人たちとそこで再会し、その人たちとともに永遠を過ごすのです。このすばらしい救いをいただいていますか？皆さん！今、話しているのはクリスチャンである人に神がくださった祝福です。喜んでいますか？皆さん！

今、私たちが見て来た「救い」もそうです。その全能なる神との「交わり」もそうです。そして、「恒久的な住まい」、そこで私たちは永遠を過ごせるのです。そんな住まいが備えられていることを感謝していますか？もし、感謝していなければあなたの信仰生活はそのことを見事に反映しています。神を崇めることをしないはずで、神に感謝をすること、神を称えることをしないはずで、なぜなら、それに対する感謝をすでに失っているからです。だから、私たちは今一度、どんなに大きな祝福を神が一方的な犠牲によって与えてくださったのかを覚えることです。

私たちは人に対してはするでしょうか？人に対しては「ありがとう」と言うではないですか？いつまでもその恩を忘れないようにと…。でも、神に対してはどうですか？日本人的かもしれませんが「恩を忘れてはならないのは神に対してではないですか？」。この方は私たちが造ってくださり、私たちはこの方に逆らい続けたのに、なおも愛して下さり、救って下さり、罪の赦しをくださり、この神と交わることを赦して下さり、天に住まいを設けてくださったのです。それなのに、私たちは感謝しない。それなのに、こんな祝福をくださった神を誉め称えていないとするなら、どこかおかしいのです。

あの十字架にイエスとともに磔にされていた犯罪人のひとり、主イエスを信じた彼にイエスはこのように言われました。ルカ 23 : 43 「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と。救いに与った人たちにはこのパラダイスが、永遠の住まいが天国が約束されているのです。あなたはそれをいただいていますか？そして、そのことを本当に神に感謝していますか？これは神からのギフトなのです。私たちはだれ一人として、こんな祝福に与る資格もないし価値もありません。地獄こそがふさわしいのに神はこんな祝福をくださった。その神に感謝していますか？

4) 神のご性質

四つ目の祝福は「神のご性質が与えられた」こと。信じる私たちに神は神のご性質を与えてくださいました。Ⅱペテロ 1 : 4 に「その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」とあります。「救われた」ということは「神のご性質」をいただいたのです。ちょうど、青虫がさなぎとなり成虫へと変わっていくように、その姿が変態していくように、私たち自身も同じように変えられていくのです。罪に汚れていた私たちが「…鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。」(Ⅱコリント 3 : 18) と。

コロサイ 3 : 10 でパウロはそのことを教えています。「新しい人を着たのです。」、救いに与ったということは「新しい人を着たのです」。生まれ変わったのです。でも、神の救いは赦しで終わらないのです。そこから始まるのです。救いはゴールではありません。救いはスタートなのです。救われた者としての新しい歩みがそこから始まるのです。ですから、コロサイ 3 : 10 では「新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、…」と続きます。救われた人、つまり、「新しい人」となった人は「新しい人としての人生」が始まるのです。

この働きをしてくださるのは聖霊なる神です。その方が内住することによって私たちは神の子どもとなったのです。そして、そのときから神の子どもとしての生き方が始まるのです。パウロは「光の子どもらしく歩みなさい」と言っています。エペソ 5 : 8 「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」と。なぜか？あなたは光の子どもだからです。つまり、救いに与っている者としてそれにふさわしく生きていきなさいと言っているのです。

神はこうして私たちに主イエス・キリストに似た者に変えていってくださる。その働きが救いととも始まったのです。光の子どもらしく生きていきなさい、新しい人を着たのだからその新しい人としての歩みを為していきなさい。どのようになっていくのか？私たちはイエスに似た者へと変えられていくということです。覚えてください、皆さん。救いに与ったときから、あなたはイエスに似た者へと変えられていくという働きが、聖霊なる神によって始まったのです。今、その過程を私たちは歩んでいるのです。これは神の働きです。

しかし同時に、私たちに責任がないのか？いいえ、実は、私たちに責任があります。コロサイ 3 : 10 の最後に「…真の知識に至るのです。」とあります。「新しい人を着た」人、救いに与った人は、新しい人としての歩みが始まっていく。そして、「真の知識に至る」と言います。もちろん、これは「霊的成長」のことです。霊的に成長した人とはどういう人か？「神のおことばを通して神を正しく知り、そして、日々の生活において、神の前に何が正しいのかを見極めて、それが選択できる人」です。

「真の知識」です。神のみこころです。それがいったい何なのかを判断できる人が霊的に大人である人です。毎日の生活でいろんなことを経験する中で、何が神に喜ばれることなのか、何が正しいことなのか、それを見極めてそれが選択できる人です。ですから、私たちも救われた者としてみことばを学んで、そして、神のことを知り続けていく必要があります。私たちが何もしないで「神さま、どうぞ、働きを続けてください。私は見えています。」というのではありません。私たち信仰者ひとり一人は、そのように生きていく責任があるのです。みことばを学びそこから正しい真理を知ることです。私的解釈を施してはならない、説教者が好き勝手な解釈をしてはならないのです。神のみことばを正しく解釈して、そして、学んだこと示されたことを神の助けをもって実践していくのです。これは私たちひとり一人がやらなければいけないことです。私たちは神との交わりをいただいた者として、いつも神の前に祈りながら歩いていくのです。信仰者がともに集まったときに、信仰の成長のために励まし合っていくのです。主を知らない人たちにキリストの福音を語っていくのです。こうして私たちの信仰は成長していくのです。そして私たちは、何が神の前に正しいかを判断できる人に成長するし、イエスに似た者へと変えられていくのです。

◎どのようにしてイエス・キリストに似た者へと変えられていくのか？

皆さん、イエスに似た者へと変えられていくと見て来ました。今から、具体的にそれはどういうことなのかを見ていきます。そのことを教えてくれているのが、ガラテヤ 5 : 22、23 に書かれている「御

霊の実」です。九つあります。「:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」、最初に「愛」が出て来ます。なぜ、最初に「愛」があるのか？多くの聖書学者は「この後の八つの実はこの愛に影響を受けているからだ」と言います。確かにそうです。順に見ていきましょう。

(1) **愛** : この「愛」は人間の愛ではなく「神の愛」です。神は確かに私たちを一方的に愛してくださった。犠牲をもって私たちを愛してくださった。私たちが見たいのは、イエス・キリストがどのような愛をもって歩いておられたのかということです。この愛はイエス・キリストの「父なる神」に対する愛です。それを見る時に、イエス・キリストは間違いなく100%父なる神を愛しておられた。そして、そのことが分かるのは、イエス・キリストはどんな時でも父なる神のみこころに従ったからです。イエスは自分の勝手な考えや自分の思いに沿って生きたのではない。彼は常に父なる神のみこころを求めそれに従って生きていきました。それは父なる神を愛していたからです。

私たちの信仰生活の中ではいつも戦いがあります。神のみこころに従って行くのか、自分のやりたいことをやっていくのかという戦いです。ご存じのように、自分のやりたいことをやりたいという願いがあってそれをやれば喜べると思うけれど、そんな喜びは一時的なものです。本物ではないからです。イエスのように変えられていくなら、私たちの神に対する愛も成長し、そして、神に対する愛が成長すれば、私たちはどんなときにも神のみこころに従って行こうとします。そのように生きていきます。そんな人へと変えられていくのです。

そして、その神を愛する愛が、イエスがもっておられた愛が、もう私たちのうちに与えられていることは説明するまでもありません。私たちが心から神を愛しているなら、その人は神の前を正しく歩んでいる人です。

(2) **喜び**、(3) **平安** : その人のうちには間違いなく喜びがあります。そして、その人のうちには間違いなく平安があります。この「喜び」「平安」というのは周りの状況とは全く無関係です。どんなことがあろうと、どんなことを経験しようとして、その「喜び」も「平安」もそれを超越したものです。なぜなら、イエスご自身がもっておられた「喜び」がそうだったからです。イエスが持っておられた「平安」がそうだからです。

皆さん、信仰者であるあなたには主イエス・キリストの「喜び」が与えられているのです。ヨハネの福音書15:11に「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」とある通りです。私たちクリスチャンには主イエス・キリストが持っておられたその「喜び」が与えられたのです。そして、イエスご自身が持っておられたその「平安」が私たちに与えられたのです。同じヨハネ14:27には「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」とあり、明確にイエスは「わたしの平安」と言っておられます。

この平安が信仰者に与えられたと言います。悲しみがない訳ではありません。辛いことが無くなったわけではありません。イエスご自身を見た時に、人々から誤解されました。拒まれました。憎まれました。蔑まれました。それでいても、イエス・キリストのうちには揺るがない喜びがあったのです。その喜びがあなたのうちに与えられたのです。イエスはどんなときでも平安を持って歩まれました。その平安が私たちに与えられたのです。

これらの三つを見たときに言えることは「すべてが神との関係」です。神の前を正しく生きているかどうかです。神を本当に心から愛し、神のみこころに喜んで従おうとしている人なら、その人には「あなたの歩みは正しい」と神が証明してくださるのです。どんなときにも喜びがあるのです。どんなときでも平安を持っているのです。

私たち信仰者がこのような神の祝福をいただいているながらこのような歩みをしていないなら、どのようにして世の人に「キリストこそが救いだ！」と伝えられますか？イエス・キリストを知らない人たちは不安で仕方がありません。今日がこの地上における最後の日かもしれない。死を迎えたらどうなってしまうのか？と。でも、私たち信仰者は今日死を迎えてもどこへ行くのかが分かっています。だから、喜びをもって平安をもって生きているのです。私たちの責任が見えますか？

イエスに似た者に変えていかれる理由が分かりますか？イエス・キリストは2000年前に十字架で亡くなり、そして、その後復活し、よみがえって来られたことを明らかにし、天へと凱旋されました。今この地上にイエスはいないけれど、あなたがいます。主のすばらしさを証するあなたがいます。神はあなたを変えようとしているのです。イエスに似た者に…。あたかも、イエス・キリストが今もこの地上にいらっしゃるかのように、神はあなたを使うのです。でも、そのためには私たちが神からいた

だいた愛が私たちのうちで成長することを願い、そのように歩んでいかなければなりません。そして、そのように歩んでいるなら、私たちは喜びをもって平安をもって歩んでいると言えます。こうして神を証するのです。

(4) 寛容 : 「寛容」とは簡単に言えば「人を赦す」ことです。残念なことに、私たちは人を赦すことがなかなかできません。大変難しいことです。でも、私たちは神の寛容さによって救われたのです。赦されたのです。パウロがその証をしています。Ⅰテモテ1:15「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と。「罪人のかしら」、つまり、罪人の中で最も罪深い者がこの私だとパウロは言ったのです。その後こう続きます。16節「しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。」と。本来なら、これだけ神に逆らって来た私たち、また、逆らい続けている私たちです。神から怒りを受けて滅ぼされてしかるべきです。しかし、神は私たちに怒りではなく、寛容さをもって対応してくださったのです。そして、罪の赦しをくださったのです。

イエスがそのように歩んで来られました。イエスは自分を非難する連中に対して、暴力を振るったり悪口を言ったりと、そのようなことはしないで、常に、彼らを赦そうとされました。私たちもそんな人へと変えられていくのです。寛容さ、つまり、「赦す」ということです。

(5) 親切 : 「親切」はもう説明するまでもないでしょう。「人に対して優しく接すること、人の幸せを願うこと」です。ただ難しいのは「どんな人に対してでも」することです。親切にしたい人はいます。幸せを願いたい人はいます。でも残念なことには、そうでない人もいます。この「親切」ということばは「すべての人に対して」です。イエスはそのように歩まれませんでしたか？マタイの福音書11:28には「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」とあり、イエスは「すべての人」を招いておられます。すべての人に対して親切であるようにと言われます。イエスは出向いて行って、そのような人たちと時間をお取りになりました。分け隔てなく…。そういう人に神はあなたを変えていこうとされているのです。

(6) 善意 : 一言でいうならこれは「親切さの実践」です。優しさ、親切さを自発的に積極的に行動に移すということです。人に対して優しい気持ちを持つとか、どんな人に対してもその人の幸せを思うという、そのような気持ちを持つことは大切です。今見て来ました。でも、それで終わってはならないのです。それを実践しなさい、それを形に表わして行きなさいと言います。イエスが人々から非難されました。これを見ていたパリサイ人たちがイエスの弟子に言いました。マタイ9:11-13「:11すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人と一緒に食事をするのですか。」:12 イエスはこれ聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」:13『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」。イエスは優しい気持ちを持っていただけでなく、実際に行動に移され、そのところに出て行かれたのです。自分のことを非難している人たちに対して、冷たくあしらっている人たちに対して、そのような人たちのところに出て行って、神の愛、救いを伝えたのです。神はそんな人にあなたを変えようとしてされているのです。

今見た「寛容」「親切」「善意」、これらは神に対するものというよりも「人に対する態度」です。こういう人、このように人を扱う人へと私たちが変わっていくことです。

(7) 誠実 : これは「信仰、信頼」と同じことばが使われています。日本語では「誠実」と訳されています。イエスが父なる神に誠実に忠実に従われたように、私たちもそのように変えられていくということです。

(8) 柔和 : どんなときでも主を信頼することによって、人の悪に対して報復や返しをしないということです。人がいろんなことを言うてくるかもしれない。いろんなことをするかもしれない。でも、私たちは変えられることによってどんなことが起こってもあることを考えるのです。それは、そこに「神の完全な計画がある」ということです。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」(ローマ8:28)、みことばの実践です。つまり、すべてのことはあなたのためだということです。

私たち信仰者にもいろいろなことが起こりますが、神はこれを通して私たちに大切なレッスンを与えようとしてくださっているのです。もっと神を信頼するために神がそうしてくださっているのです。どんなときでも神の約束に立っている。神の約束を覚えてそれを信じているのです。私たちの感情、肉は言います。「返ししなさい。言われたら言い返しなさい。やられたらやり返しなさい」と。柔和な人

はそうではないのです。神の約束を信じて正しいことを選択するのです。先程も見たように、イエスがそうでした。

(9) **自制** : 最後に「自制」、「自制」とは「自分の欲望や感情を抑えること」です。私たちにも日々の生活においてこの肉が、欲が自分のやりたいことをやるようにと仕向けて来ます。でも、その中にある「自制心」は、父なる神のみこころを行おう、神が喜ばれることを行っていこうとします。自分のそういう間違っただけの思いを押えるのです。そして、却って、神が喜ばれることを選択して行こうとするのです。この「自制」の反対語は「放逸、放縦」です。どちらも節度をわきまえずに勝手気ままに生きることです。だから、私たち信仰者はどんな時でも神のみこころを探り求め、それに従って行こうとするのです。

今、私たちは9個の事を見て来ました。最後の三つは神に対してではなく、人に対してでもない、自分自身に対するものです。神に対して忠実に従って行こうとするし、どんなことがあっても神の約束を信じてその約束に立って行こうとするし、肉が私を支配してコントロールするのではなくて、神の前に喜ばれることを考えて、そして、そのように歩いていこうとするのです。

このように生きたのがイエスです。そして、聖霊は私たちを生まれ変わらせてくださり、このように生きるようにと私たちを助けてくださるのです。神が私たちにくださった祝福は「救い」であり「交わり」であり「恒久的な住まい」であり、そして、「神のご性質」です。この祝福です、皆さん！忘れてはならないのは…。

そして、この祝福に対して私たちはどのように応答していけば良いのか？みことばが教えてくれます。詩篇116：12、13「12 主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何をお返ししようか。」、まさに、私たちが問いかけることです。いったい、こんな恵みの主に何をお返ししたら良いのか？どう感謝したら良いのか？この恩にどう報いたら良いのか？続いて言います。「13 私は救いの杯をかかげ、【主】の御名を呼び求めよう。」と。この詩篇の著者が言ったことは、主の恵みに対してそのあわれみ深さ、その優しさに対してどう答えたら良いのか？です。そのように自問した彼はこう言います。「会衆の中であって、人々の中であって、私は主を誉め称える」と。それが彼の結論です。こんなにすばらしい祝福をくださった神を私は人々の前で誉め称える、それが私がこの方に対して為すことだと言うのです。「救いの杯」とは「救いが与えられたことへの感謝」です。

私たちに何ができるのか？この神を誉め称え続けることです。この方のすばらしさを称え続けることです。この方を賛美し続けることです。そのためには、与えられた祝福をしっかりと覚えなければなりません。このような祝福をもって神はあなたや私を祝してくださったのです。

この新しい一年、主に何をお返ししようか？神を誉め称えることが私たちにできることで、そのことを私はしていきたいとその決心をもって日々歩み続けてください。私たちの神はすばらしい祝福をもう私たちに与えてくださいました。